# 計画のない旅 2025

2025 年 11 月
旅のチカラ研究所　植木圭二

11 月の中旬、紅葉シーズンの関東一円を巡ってきた。ただし今回の旅は、訳あって行先や宿を決めない“計画のない旅”になった。それでも楽しく有意義な旅になったので紹介したい。

■行き当たりばったりの旅

私の先輩が有名なリゾート地に住んでいて、私は旅友 3 人を誘ってその先輩の家を拠点に 3 泊 4 日の旅行を計画していた。

ところが直前で、のっぴきならぬ事情により宿泊できないことになった。私はその穴を埋めるべく新たな計画を立案しようとしたが、正直なところ時間もなく面倒くさくなってきた。そこでこの面倒くささを逆手にとる方法を思いついた。

それは行き当たりばったりの旅で、いわゆるミステリーツアーだ。ただし旅行会社のミステリーツアーは全てを予約した上で参加者に行先を伝えていないだけだが、今回の私たちの旅は場当たり的な“計画のない旅”で何も決めないで行くことにした。

しかしさすがに当日夜になっても泊まる宿がないのでは困るから、当日の朝には宿を予約することにした。

初日の宿は、幸いにも同行する旅友の中に群馬県出身者がいて、現在その実家が空き家になっており、そこに泊めてもらうことにした。

その群馬出身者の旅友 G、そして東京生まれの旅友 T、さらに和歌山からこの旅のために来た旅友 W の 3 人が今回の旅の同行者になる。その 3 人と横浜で落ち合い、私の車で群馬県に向かった。

■床もみじ

群馬に詳しい旅友 G は、「この時季には桐生の宝徳寺の“床もみじ”が綺麗だよ」と言っている。そこで私たちは桐生の市街地を抜けて田舎道を山あいに車を走らせる。

床もみじとは、床板に紅葉（もみじ）が映り込む風情ある景色のことで、京都の寺では多く見ることができるが、関東では珍しい。その珍しい景色を見るために寺の前の道路には大きな臨時駐車場も出来ており、大型観光バスが何台も停まっている。こんな田舎（失礼？）にしては似つかわしくない風景と言ったところだ。

寺の入口で私たちは唖然とする。それは入場料、いや寺だから拝観料を 1200 円も取っていることで、旅友 W は「まるで京都の寺のようだ」と言っている。

高い拝観料を払って境内に入る。何と言っても、もみじがとても綺麗だ。もみじ以外にも鉢植えの花や石庭、灯篭や洒落た地蔵が何体もデザインされて配置良く置かれている。

それはまるで京都の寺のようにも思える。桐生は織物産業が盛んで、“西の西陣、東の桐生”と言われて、小京都と呼ばれていたことを思い起こしてしまう。

【宝徳寺の入口付近】

この寺の起源はその名前が示すように宝徳年間ということなので 1450 年頃だが、このように整備されたのは極最近のように思える。整備したから参拝客が増えたのか、参拝客を増やすために整備したのか、どちらが先かは分からないが、いずれにしても床もみじの効果は絶大だ。

旅友 G は「相当お金をかけているよ」と言い、旅友 W は「何しろ 1200 円だから、かなり儲かっているね」と言っている。

そしてお目当ての床もみじは、寺の一番奥にあって、多くの参拝者で賑わっている。見るための順番待ちの列ができているほどだ。私たちも最終尾に並んで、少し待ってから床もみじを拝観する。

磨き上げた床に庭のもみじが見事に映っている。実に風情があって美しい。まるで映画の世界のようで、景色に引き込まれていくという感覚に陥る。

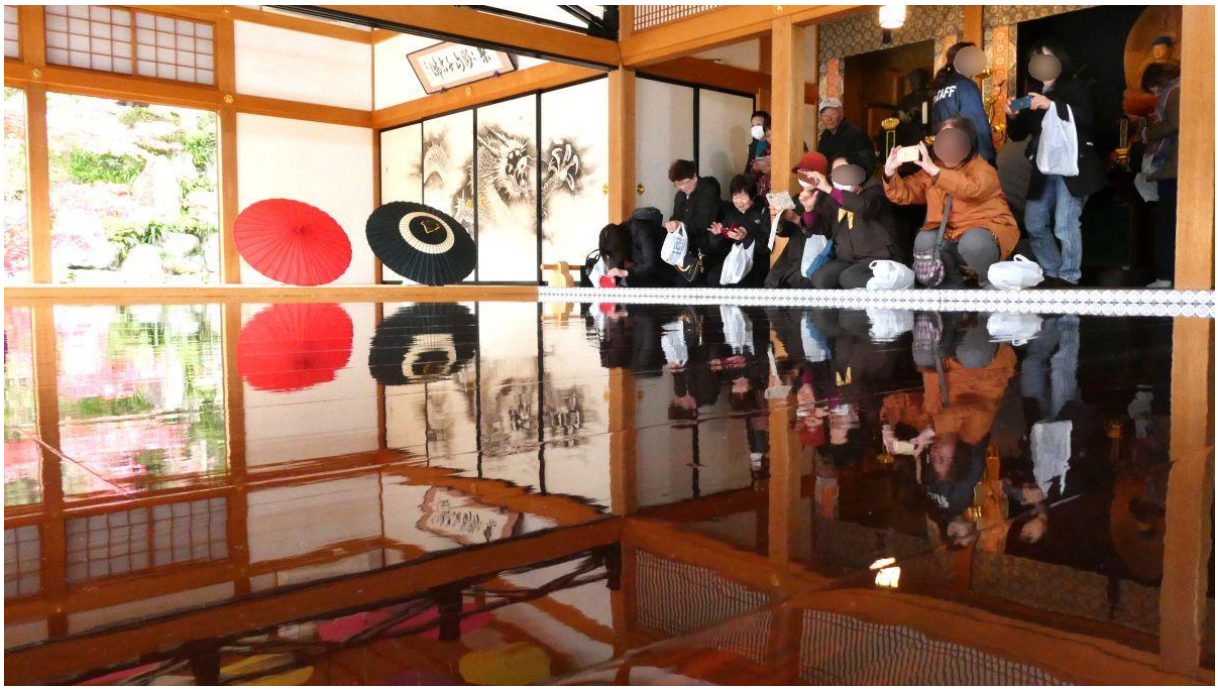
私は、正直このような景色は見たことがなく、とても感動している。旅友たちの反応を見ても私と同じよう、あるいはそれ以上に感動しているようだ。

【床もみじの正面】

【床もみじの横面】

ところがよく見ると、実は床もみじは仏像のために造られた景色で、一番良く見える場所に仏像数体が並んで座している。しかし参拝者たちはそれら仏像には見向きもせずに、それどころか仏像に尻を向けて、写真を撮りまくっている。

「これではご利益無いよね」と旅友 T が独り言をポツリと言っていた。



【右奥に仏像が並んでおり、それの前で写真を撮る参拝客たち】

■ひもかわうどん

群馬県は昔から小麦の産地で、うどんが有名だ。

桐生には昔から“ひもかわうどん”という幅広麺があって最近はインスタ映えで有名になっている。幅広麺といっても麺の幅は店によって異なり、2cm ほどのものから 10cm 以上の超幅広もある。ただし幅の狭い麺は通常のうどんのように食べられるが、超幅広の麺は食べるのに苦労する。

私は以前、1 人で桐生に来た時にその超幅広のひもかわうどんを食べたが、箸で掴むのにも苦労したことを想い出した。

今回私たちが入った「川野屋」のひもかわうどんは、麺の幅は 2cm ほどで食べ易かった。

群馬のうどんにはもう一つの特徴がある。それは“煮込みうどん”で、掛けうどんではなく、煮込んでいる。煮込むことによって麺に出し汁がしみ込んで美味い。

関西人の旅友 W は「何でこんなに真っ黒なの！？」と言っている。確かに私から見ても濃いので、薄い色の汁に慣れた関西人から見れば、異常に見えるだろう。それでも旅友 W は汁を全部飲み干したから、味には満足だったのだろう。

【川野屋の煮込みひもかわうどん】

■那須高原へ

その夜、桐生市内の居酒屋で一杯やりながら、明日は何処に行こうかと話し合う。

せっかく群馬県まできているのだから県内の草津温泉や万座温泉、隣の栃木県の日光や那須高原も近い。少し足を伸ばせば福島県の高湯温泉、茨城県の袋田の滝、千葉県の犬吠埼まで行けるという様々なアイデアが出てくる。

まとまらないと言えばそれまでだが、こんなことがなければ群馬県から 2～3 時間で行ける温泉地や名所を議論することもない。その意味では新鮮かつ有意義な会話だ。

そんな時に旅友 T が「今度モンゴルに旅行に行くけど、確か栃木県のどこかにモンゴルの遊牧民が寝泊りする“ゲル”があると、テレビで見たけど、何処か知っている？」と聞いてきた。

私は「それは那須高原のモンゴリアンビレッジ『テンゲル』だよ」と言うと、皆の関心が集まる。旅友 T は「やっぱり那須か、そこまで遠い？」と言うから、私は「そんなに遠くない」と答えると、皆は「面白そうだね、どんなところだろうか」と聞いてくる。私は「モンゴルに行った気分になるよ」と答える。

実は私は 2015 年 10 月に那須高原のその施設を訪れており、その時の同行者たちも感激していたことを思い出した。

旅友 G の実家で 1 泊して、朝の出発前に那須高原のテンゲルを予約した。そして今、私たちは東北自動車道を北上している。

■大谷石採掘場跡

東北自動道を運転しながら、私はこの近くに大谷石（おおやいし）の採掘場跡があることを思い出した。私はかねてよりそこを訪れたいと思っていたがなかなかその機会がなく、今回はチャンスと思い、それを皆に伝える。

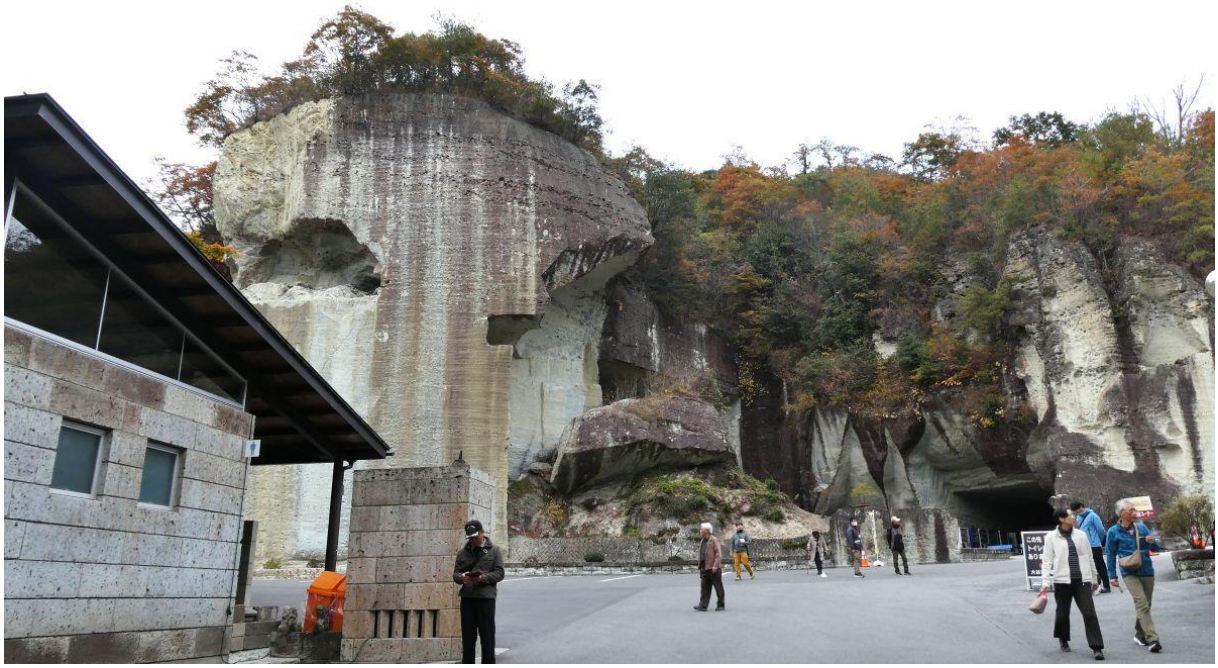
メンバーの反応は「行ったことないから行きたい」とか、「行ったことがあって、良かったよ」とか、「良く分かんないけれど途中ならいいよ」と様々な反応だったが、すぐに行くことが決定する。

そして車は高速道路を降りて大谷石採掘場跡に向かう。

大谷石とは、栃木県宇都宮市北西部の大谷町付近で採掘される軽石凝灰岩の石材で、柔らかく加工し易く、消臭効果や耐火性など多くの特性を持っている。

採掘場跡に近づくと、大谷石で造られた蔵や母屋そして店舗も現れる。さらに採石場跡の入口には自動販売機があり、それも大谷石でできている。いや、さすがに自動販売機は大谷石ではなく、それを模しているだけだ。

【採掘場跡の自動販売機】



【大谷石採掘場の入口付近】

採掘場跡の中に入ると、非常に広い地下空間が広がっている。石を切り出した跡なので直線性が保たれた石の面が露出している。近年になって機械化されてからは、綺麗な裁断面だが、古い時代に掘った部分は手彫りなのでツルハシの痕が残っている。

パンフレットによれば縦 140m×横 150m で、最深部は 60m というから相当に広く深い。そして気温は約 8℃で、一年中変わらないと書かれている。

【大谷石採掘場跡の地下空間】

この地下空間を利用してコンサートや何十本もの映画の撮影が行われている。確かに音響効果は抜群で、こんな場所でのコンサートならば私も聴きに来たくなるほどだ。

旅友たちは口々に「日本にもこんな場所があったのか」とか、「インディージョーンズの映画のロケに使われてもおかしくない」とまで言っているから、相当に感動したようだ。

■ゲル

テンゲルに到着する。受付をして施設の中に入ると、30 張りくらいのゲルが並んでいる。

ゲルとは、簡単いえば遊牧民のテントで、円柱形でほんの少しだけ屋根が尖っている。外側は白い布で覆われていて出入口が 1 つあるだけで窓はない。

内部に入ると、4 台のベッドが壁に沿って中心を取り囲むように置かれている。その中央には四角いテーブル、そして四角い小さな椅子がある。室内はエアコンが効いていてとても暖かい。冷蔵庫やテレビもあるが、洗面台やトイレなどの水回りはない。

【ゲルが並んでいるエリア】

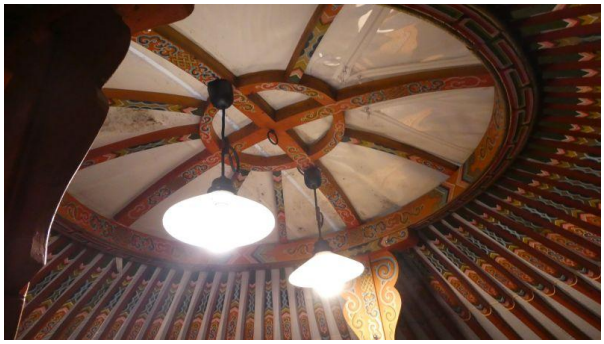
【私たちが泊まったゲルの内部】

トイレや大浴場は受付をした管理棟にあって、大浴場には露天風呂も付いており温泉を引いている。晴れていれば温泉に浸かりながら露天風呂から満天の星空が見えるようになっている。

実は私は一昨年モンゴルに行って、現地の人が暮らしている本物のゲルを体験してきた。そして本日私たちが泊まろうとしているゲルは、モンゴルから機材を輸入して作ったから本物そのもので、違いはモンゴルと日本の環境の違いによるものだろう。

例えば、ここ那須高原のゲルはエアコンと空気清浄機があって室内を密閉しており、照明のために天井に電灯がある。一方モンゴルで私が体験したゲルは電気が来ていないので暖は取るためのストーブの煙突が天井から出ていて、換気や明り取りにもなっていた。

モンゴルは空気が乾燥しているので、ほとんど雨が降らない。それゆえ天井を開けられるが、雨が降る日本ではそうはいかないからだろう。



【那須高原のゲルの天井】

【モンゴルのゲルの天井】

ゲルの中ではお茶を飲む程度で、食事は管理棟にあるレストランへ食べに行く。

実は今朝電話で予約した時に、当日なので夕食の用意はできないと言われた。しかし紅葉シーズンとはいえ基本的には今の時季は高原のリゾート地はシーズンオフで、レストランが近くにあっても営業しているとは思えない。そこで電話口のスタッフに夕食を用意してもらえないかと無理矢理にお願いした。スタッフは「上の者に聞いてきます」と言って、しばらくして OK になった。

その無理矢理お願いした夕食は、モンゴルらしく肉たっぷりの BBQ で、かなりの量なので腹いっぱいになる。

【BBQ の食材】

食事の後はモンゴルの伝統楽器の馬頭琴（ばとうきん）の生演奏がある。演奏してくれるのはモンゴル人で、なぜか歌手の細川たかしに似ている。

馬頭琴は 2 本弦で、弓・弦ともに馬の毛を用いている。先には馬の頭の装飾があるから馬頭琴と呼ばれている。

演奏を聴きながら目を閉じていると、モンゴルの平原やゲルの光景が浮かんでくる。

【馬頭琴の生演奏】

馬頭琴の演奏が終わってゲルに戻り、四角いテーブルを囲んで、やや薄暗い電灯の下で酒を飲みながら“明日何処に行くかの作戦会議”が始まる。

それは関東という平原を放浪する放牧民になったような気分になるから不思議だ。

■彩甲斐街道で秩父へ

翌日になる。案の定というか、昨夜の作戦会議は単なる飲み会になってしまい、結局何も決まっていない。朝食後、ゲルを出る前に本日の予定を決めなくてはならない。

旅友 W が「逆転の発想で、関東で一番人気のない県は何県？」と聞いてくる。

旅友 G は「それはやっぱり茨城県かな」と言う。

旅友 T は「茨城県には袋田の滝も、ひたち海浜公園もあるけど、何もないのは埼玉県かも」と埼玉を推している。推された埼玉県は何と迷惑な話だろう。

旅友 W は「埼玉かぁ、確かに関西でも何も聞かないなぁ、そういうところに行くのも面白そうだよ」と言っている。

旅友 G は「埼玉は何も無いけど、その中にあって秩父はいいかも、実は私は秩父に行ったことがない」と言っている。

そして他の 2 人も行ったことのない秩父行が決定する。

さらに私が「秩父から山越えをして山梨県に行って石和（いさわ）温泉に泊まるのはどう？」と切り出し、賛同が得られて秩父に行ってから山梨に入るルートが採択される。

私たちは東北自動車道を南下して北関東道に入る。そしてカーナビが示し時間的にも早く行ける関越道に入らず、北関東道を途中で降りて熊谷から国道 140 号を使って秩父を目指す。

どうしてそのルートに私がこだわるのかというと、国道 140 号は彩甲斐街道と呼ばれる道で埼玉県の熊谷から秩父を経由して山梨県の甲府に行くが、興味深いことに国道に指定されて半世紀もの間、埼玉・山梨の県境は繋がっていなかった。そして 1998 年に雁坂トンネルが開通して繋がった。

そんな繋がらない国道があったことを今となっては誰も知らない。

彩甲斐街道は、その昔は秩父往還（ちちぶおうかん）と呼ばれていた。それは中山道の熊谷宿から荒川沿いに秩父を抜けて雁坂峠を越えて甲府に至る街道だった。

10 年前の 2015 年 12 月、街道歩きに興味を持っていた私と妻は秩父往環 140km を 5 日間かけて歩いた。その時の様子は旅行記「秩父往還歩き旅 2015」に書いた。この旅行記は私が旅行記を書き始めて間もない頃で、読み返すと何やら恥ずかしいが、新鮮味もある。

そして今回私たちは栃木県の那須高原から埼玉県の秩父までの約 200km を約 3 時間で走ってきた。意外に近いので皆は驚いている。

■秩父

まずは、秩父の市街地の真ん中にある「秩父神社」を参拝する。

秩父神社の例大祭は有名な「秩父夜祭」で、京都祇園祭、飛騨高山祭と共に日本三大曳山（ひきやま）祭と呼ばれている。江戸時代から 300 年あまり続いている由緒ある祭りで、それを催す秩父神社も歴史があってとても趣がある。

秩父夜祭は毎年 12 月 3 日に開催されるので、10 年前に秩父往環を歩いた目的の一つはそれを観るためだった。

人口約 6 万人の秩父の街に地元や周辺の人々、そして関東一円、日本各地、世界各地からも多くの観光客が訪れ賑わっていた。夜祭の最後は冬の夜空に約 7 千発の花火があがったことを思い出した。

そんな思い出を抱きながら秩父神社を参拝して、昼食時なので秩父名物の豚丼を食べることになる。

秩父の豚丼は、この地方で伝統的に用いられてきた豚肉の味噌漬を焼いてご飯にのせたもので、炭火にこだわって焼いているから非常に香ばしい。

私好みの味だが、他の 3 人は味噌の味が濃くて、しょっぱいと言っている。

豚肉の味噌漬には伝統があるが、それを使った豚丼は 2008 年に登場したと言うからまだ新しい。その意味でもまだまだ発展途上かもしれない。

【秩父神社】

【豚丼】

■三峯神社への道

秩父は信仰の地で、“秩父三社”と呼ばれる有名な神社が 3 つある。一つは秩父の入口の長瀞にある宝登山（ほどさん）神社、もう一つは先ほど参拝した秩父神社、そし 3 つ目が三峰神社で、三社の中で最も高い山の上にある。

市街地から車で山道を登って行くと、紅葉がとても綺麗だ。しかし道は狭く曲がりくねっている。自分の車だから走れるが、レンタカーや他人の車ではとても運転する気にならない。

しばらく進むとトンネルがある。私の車のカーナビに載っていないトンネルなので、カーナビはトンネルに入らないルートを案内している。しかし Google map ではトンネルが載っている。おそらく開通して間もないのだろう。

前の車がトンネルに入って行くので、私たちも後に続く。ところがトンネル内は道が舗装されておらず、それでも天井や壁は新しい。そして制限スピードが時速 15km、さすがにそれでは遅いから、時速 40km 位で通行する。

この摩訶不思議なトンネルを抜ける。地図で見ると大幅にショートカットしたようだ。

本稿を書くために、このトンネルについて調べてみると興味深いことが分かる。

秩父県土整備事務所によると今年 7 月と 9 月に発生した落石によって国道 140 号線の一部区間を来年 2 月まで通行止めにして、建設中の大滝トンネルを暫定的に開放したと書かれている。だからあのトンネルは舗装されていない未完成のトンネルだった。もしもカーナビの指示通りに進んで行ったら、途中で戻らなければならなかった。

それにしても未完成のトンネルを通行させなくてはならないとは、他に迂回ルートがないことと、復旧工事がなかなか進まないほどの山奥ということなのだろう。

■三峰神社を参拝

そんな道路を何とか走り抜けて、標高約 1100m の三峯神社にやって来る。ここでも見事な紅葉が私たちを迎えてくれる。

【三峰神社の駐車場から境内に行く途中の紅葉】

参道に入るところで鳥居の足の両側に小さな鳥居が付いている三ツ鳥居がある。

旅友Wは「こんな鳥居は関西でも見たことない」と驚いている。私も過去に何回かこの神社を訪れているが、あまり気にしたことがなかった。塗装を白く塗り直したばかりのようで、目立つようになったのだろう。

【三峰神社の三ツ鳥居】

三峰神社はかつてフィギアスケートの浅田真央が参拝して試合で好成績を残したので、彼女がここをパワースポットと紹介したので一挙に参拝客が増えたという逸話が残っている。

パワースポットの三峰神社は実に荘厳で奥深い。大きな隨神門は見事な構えをしており、御神木の太い杉の木は真っ直ぐ上に伸びて天を目指しているように感じる。

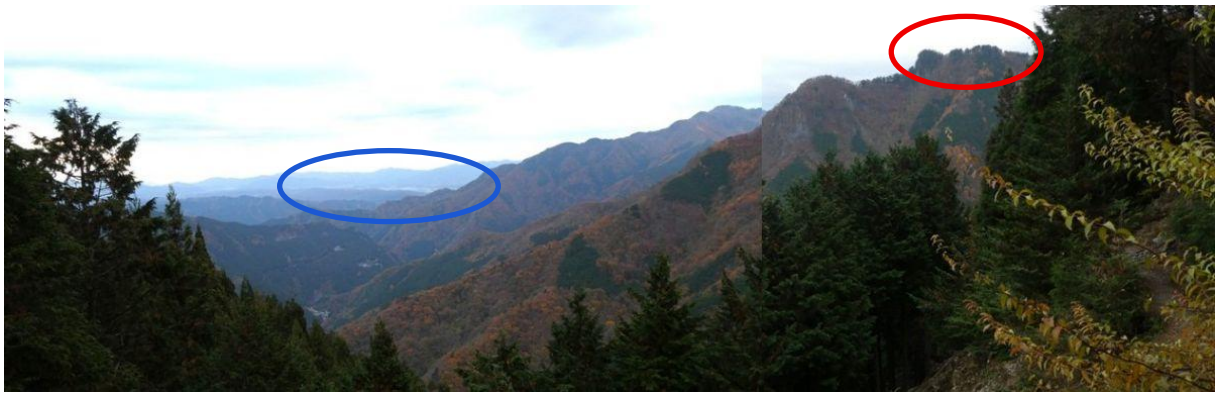
その御神木の間をくぐり参拝する。

私は2礼2拍手して、目を閉じる。すると拍手の響きが澄んだ空気の中を伝って周囲の山々から戻ってくる。その響きが体の中に吸い込まれて心の中が洗われたような気持ちになる。これがパワースポットたる由縁なのかと感心し、最後に1礼をして参拝を終える。

【両側に御神木の杉と正面に本殿】

実は三峰神社はここだけではない。本殿から離れた標高 1329m の妙法ヶ岳の頂上に奥宮がある。そこまでは簡単に行けないので、奥宮を遠くから参拝する遥拝所が境内の見晴らしの良い高台にある。ただ残念ながら奥宮は肉眼では確認できない。やはり心眼で見るものなのか。

奥宮以外に遠く秩父の街も見ることができる。



【遥拝所からの景色　赤い○が奥宮、青い○が秩父の街】

■雁坂トンネルを抜ける

夕方の 4 時過ぎ、三峰神社を出発する。山あいなので既に暗くなっている。その暗い道を山梨県目指して車を走らせる。辺りには人家はもちろん街灯も何もない。

「ここも埼玉県なの？こんな田舎が関東にもあったの？」という声が後部座席から聞こえてくる。運転している私にしても、非常に心もとない気持ちになる。

埼玉県と山梨県の県境がある雁坂トンネルに入る。それは 1998 年に国道 140 号を繋げたトンネルで、ここを抜ければ山梨県になるが、このトンネルが 6.6km もあって長い。それでもトンネル内は照明が点いているので、心細くない。長年ハンドルを握って日本各地を旅してきた私だが、トンネルが明るいと思って安心できたことはこの時限りだろう。

この道が秩父往環と呼ばれていた時代はもちろんトンネルはなく、旅人たちは歩いて雁坂峠を越えていた。

雁坂峠は日本屈指の難所で、標高は 2082mもある。今、私たちが走っている雁坂トンネルの標高は約 1090m、つまり 1000m も上に雁坂峠がある。

ちなみに雁坂峠は徒歩のみ通行できるが、雁坂トンネルは徒歩通行が禁じられている。

10 年前に秩父往環を歩いた時は難所の雁坂峠は断念して雁坂トンネルを抜けた。徒歩通行禁止のトンネルをどうやって抜けたか。興味ある人は旅行記を読んで欲しい。

後日調べると、国道 140 号線は時々通行止めになるという。それはあの建設中の大滝トンネル付近ではなく、もっと山奥の部分で、雁坂トンネル近くの埼玉県側でがけ崩れや落石が発生することが多いからだという。

もしもこのルートが通れなかったら大変なことになっていた。今後通行するには事前に確認しないといけない。秩父往環・彩甲斐街道・国道 140 号線、恐るべし。

■石和温泉に泊まる

トンネルの途中で県境を越えて山梨県に入る。トンネルを抜けると街路灯も目に付くようになり、少しずつ民家も見え始めてくる。車内には何となく安心感が漂う。

やがて石和温泉の商店街に入り、今朝予約したホテルにチェックインする。

実は今朝の予約は、何軒かのホテルに電話をしたが、どこも空いていなかった。どうやら紅葉シーズンがその理由のようだ。それでも土地勘もない旅友 W が選んだ宿が空いていて予約できた。それは旅慣れた者の勘か、無の境地とでもいうものなのか。

昨日のゲルは交渉で夕食を用意してもらったが、今日はそれをしなかった。その理由は、石和温泉は都市型の温泉地なので食事する店がたくさんあるからだ。

石和温泉は 1961 年に甲府盆地の比較的人家の多い地域のブドウ畑から高温の湯が沸き出て、近隣の人々が入浴する青空温泉で有名になった。湧出温度は 49℃というから少し冷めれば適温になるから青空温泉になったのだろう。

だから街の雰囲気は他の温泉地とは全く異なっており、昔ながらの宿や温泉街らしきものは全く無く、商業施設や一般住宅が混在する広々とした土地に近代的な温泉ホテルが点在している。

泉質は PH9.1 のアルカリ泉なので、ツルツルになるから美肌の湯と呼ばれている。それだけでなくこの温泉は日本屈指の湧出量を誇り湧出場所も近い。従って温泉の鮮度が高く、アンチエイジング効果も期待出来る。それゆえ湯に浸かっているだけで癒されて気持ちいい。

パワースポットの三峰神社で元気をもらい、ここでアンチエイジング効果の湯に浸かるとは何と贅沢な旅なのか。

■善光寺

翌朝、「甲斐善光寺」を訪れる。念のため断っておくと、この寺は長野の善光寺の出先の寺ではない。それを理解するには日本の歴史を遡ることになる。

飛鳥時代より前の古墳時代末期 538 年に百済の聖明王から仏像が贈られたことから日本の仏教は始まった。

ところが教科書にも出てくる蘇我氏と物部氏の争いの中で、その仏像が池に捨てられた。

その捨てられた仏像を「本田善光」という人が見つけて、自分の出身地に持ち帰り寺を建て安置した。その寺が信濃の国にあって、現在の長野の善光寺になる。

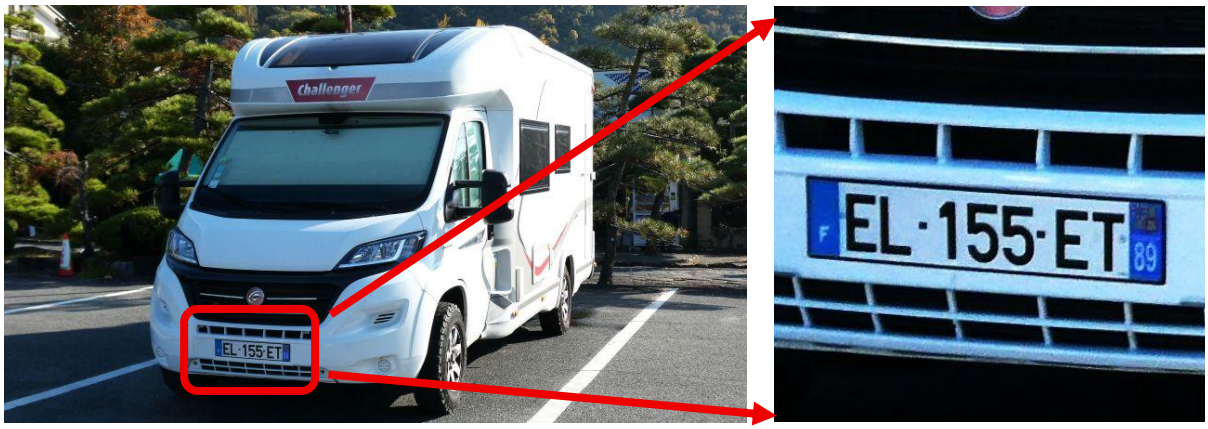
ところが 1555 年の川中島の戦いで甲斐の武田信玄がこの仏像を持ち帰り、安置するために建てた寺がこの甲斐善光寺だ。持ち帰った理由は戦火を逃れるためにということになっているが、私は戦利品として持ち帰ったものだと考えている。山梨県では「信玄公」のことを悪く言わないという暗黙の了解があるから、そのようになっているのだろう。

仏像は武田家滅亡により信濃の善光寺に戻ったが、武田家が滅ぼされなければ甲斐善光寺が本家の善光寺を名乗り、長野の方は信濃善光寺とでも呼ばれていただろう。

歴史とは勝者によって作られていく。

■キャンピングカー

参拝を終えて駐車場に戻って来ると、あまり見かけたことがない大型のキャンピングカーが停まっている。どこから来たのか気になってナンバープレートを見ると、驚くことに EU のナンバープレートで、F の文字が書かれている。ということはフランスからやってきたキャンピングカーになる。




【EU のナンバープレートのキャンピングカー】

皆にそのことを伝えると、ナンバープレートを見て驚いている。そして旅友 T が「フランスから車に乗ってこられるの？」と聞いてくる。

私は「陸路は無理でしょう」と言い、続けて「昨年春に北海道の美幌町でもドイツからやって来たバイクを見たけれど、それも EU のナンバープレートで D の文字が書かれていたよ。そのバイクに乗ってきたドイツ人に聞いたら、バイクは船で日本に送って、本人は飛行機で来日したと言っていたよ、だからこのキャンピングカーも貨物船で運んだみたいだ」と説明する。

すると旅友 G が「ひょっとして、ここを長野の善光寺と間違えて来ているのかも」と言い、旅友 W は「その可能性は充分あるね」と言っていた。

■トンネルでワイン貯蔵

山梨県と言えばワイン、そこで杭州市の「勝沼トンネルワインカーブ」を訪れる。

ワインカーブとは自然の洞窟などを利用してワインを貯蔵する施設で、ここでは廃線で使われなくなった旧国鉄のトンネルを利用している。トンネルは 1903 年（明治 36 年）に建造されたもので、レンガ積みで長さ 1100m もある。

鉄でできた頑丈な扉を開けてトンネル内に入ると、ひんやりとした冷気が私たちを迎えてくれる。年間を通じて温度は 13℃位に維持されており、ワインの長期熟成に最適だという。

ここで思い出したのは大谷石採掘場の平均気温だ。確か 8℃だったのでここよりも 5℃低い。この違いは一体何だろう。緯度も標高も大差がないから、石和温泉のことを考えると地熱の影響かもしれない。

日本各地にはこのような地下空間はたくさんあり、おそらく温度はそれぞれだろう。これは今後の旅のテーマの一つになるかもしれないと思った。

入り口から 30m くらい進んだところから先にワイン棚が左右に置かれており、その遥か向こうにも扉がある。その扉までが一般の人がワインを預けている場所で、扉の奥は業者用のものになっている。ということは 1km 以上もワインが並んでいることなり、全体で約 100 万本を貯蔵している。

【勝沼トンネルワインカーブの内部】

ちなみに一般の人がワインを預ける費用は棚一つで年間 5 万円、一つの棚には約 300 本入るというから 1 本 166 円になる。ざっと計算すると年間 1 億 6 千万円以上もの保管料が管理している甲州市に入ってくる。預けている人にとってもここに預けているというステータスがワイン通にはたまらないから、完全に Win-Win の関係になっている。

問題は現在 200 人以上待っている人がいて、申し込んでもいつ利用できるか分からないことだろう。

廃線になったトンネルがこのように第二の人生を送っているというのは、私はあまり見たことがない。普通ならば埋められるか閉鎖されて朽ち果てるのを待つだけなのに、静かな余生を送りながらも人々の役に立っているというのは、トンネルにとっても有意義な老後と言っていいだろう。

そして大谷石採掘場跡も役目を終えてコンサートやドラマ撮影で第二の人生を送っていた。

このトンネルワインカーブのすぐ前にもトンネル「大日影トンネル遊歩道」がある。

前回来た時は立ち入り禁止だったが、現在は中に入れる。しかも照明も完備しており、長さ約 1.4km ということで 1 時間もあれば往復できる。

このトンネルも第二に人生をこれから送るのだろうか。

今度はこの廃線ウオークに来たいと思いながら、トンネルを後にする。

■リニアモーターカー

大月 IC から車で約 10 分行ったところに「山梨県立リニア見学センター」がある。この施設の見学が、今回山梨まで来た大きな理由と言ってもいいだろう。

リニアモーターカーは 1962 年に研究が始まり、1997 年に実験線を宮崎県から山梨県に移した。その実験線を活かしてリニア中央新幹線が 2027 年に東京-名古屋間で開業予定だった。

問題は、そのほとんどはトンネルで現在は静岡県の反対により静岡県の部分だけトンネル工事が進まず、開業の目途さえ立っていない。

先ほどのワインカーブのトンネルや大谷石採掘場跡も有意義な第二の人生を過ごしていたが、一方では開業の目途も立たないリニア中央新幹線のトンネルもあり、何とも皮肉な巡り合わせだろう。

この見学センターの最大の目玉はリニアモーターカーの走行試験を見ることで、約 42km の実験線を時速 500km で往復するので、おおよそ 10 分間に 1 回くらい目の前を通過する。

それはまさしく目にも留まらぬ速さで、振動と轟音と共に一瞬で通り過ぎて行く。さすがに時速 500km は半端でない。

【時速 500km のリニアモーターカーの走行試験】

この圧倒的な科学技術の力を目の当たりにして感動や感激はもちろんのこと、元技術者の私は武者震いのようなものまで感じる。

技術者になること夢見ていた少年時代に戻り、こんな仕事をしてみたかったという少年の日の憧れを思い出した。

ある意味、これも現代版パワースポットなのかもしれない。

リニアモーターカーに感動をもらい、私たちは帰途につく。

そして車内では、次の“計画のない旅”をどうするかで盛り上がっている。このような行き当たりばったりの旅も意外に面白いことが分かったようだ。

■旅の記録

実施は 2025 年 11 月 12 日（水）～11 月 15 日（土）の 3 泊 4 日、その行程を示す。

・1 日目　12 時 30 分新横浜駅で待ち合わせして、私の車に 4 人乗って出発
16 時 30 分に桐生の天然温泉「ゆらぶ」で立ち寄り湯、17 時 30 分旅友宅に到着、
18 時に「海鮮どんさん亭 新宿郷屋敷」で夕食、旅友宅に戻る

・2 日目　8 時 30 分に「ジョイフル 桐生店」で朝食、10 時 30 分に「宝徳寺」を参拝、
12 時に「川野屋」で“ひもかわうどん”を食べ、14 時に「大谷資料館」訪問
16 時に那須高原の「モンゴリアビレッジ テンゲル」にチェックイン

・3 日目　10 時に宿を出発、13 時 40 分に「秩父神社」拝観、14 時に秩父「ちんばた」で
豚丼の昼食、15 時 45 分に「三峰神社」参拝、雁坂トンネルを抜けて
石和温泉の「石庭」にチェックイン、コンビニで買った弁当で夕食

・4 日目　8 時 30 分に宿を出て、「甲斐善光寺」参拝、
9 時 45 分に「勝沼トンネルワインカーブ」見物、
10 時 30 分に「山梨県立リニア見学センター」を見学、
12 時に神奈川県に戻り、打ち上げ後に解散

費用の総額は 1 人当たり約 4 万円、詳細を記す。

| | | |
|---|---|---|
| ・宿泊費 | 1 日目旅友宅 | 0 円 |
| | 2 日目テンゲル | 14800 円（2 食付宿泊代＋飲み放題） |
| | 3 日目石庭 | 9450 円（1 泊朝食付き宿泊代） |
| ・交通費 | 高速道路 | 約 2770 円（全体費用を 4 で割った金額） |
| | ガソリン代 | 約 2100 円（同上） |
| | 駐車場代 | 約 300 円（同上、新横浜 300 円、秩父 400 円、三峰神社 520 円） |
| ・入場料 | ゆらぶ | 800 円 |
| | 宝徳寺 | 1200 円 |
| | 大谷資料館 | 800 円 |
| | リニア見学 | 420 円 |
| ・食費 | どんさん亭 | 3700 円（全体で 14800 円） |
| | ジョイフル | 約 600 円（全体で 2355 円） |
| | 川野屋 | 650 円 |
| | ちんばた | 1200 円 |
| | 最終日昼食 | 2500 円（打ち上げのためアルコール含む） |
| | その他 | 約 2000 円（買い出しの酒類等） |